

神聖喜劇

第五卷

大西巨人

光文社

神聖喜劇 第五卷

一九八〇年四月二五日 初版第一刷発行
一九八〇年九月一日 第五刷発行

著 者 大西 巨人

装幀者 栃折 久美子

発行者 小保方 宇三郎

発行所 株式会社 光文社

東京都文京区音羽二丁目一三ノ郵便番号112
電話 東京(〇三)九四二二三四一(代)
振替 東京六一一五三四七

印刷所 株式会社 堀内印刷所

製本所 有限会社 榎本製本所

定価 一、四〇〇円

神聖喜劇
第五卷
目次

第八部 永劫えいごうの章

第一 模擬死刑の午後

第二 模擬死刑の午後（続）

第三 面^め天^{んでん}奈^な狂想曲

終曲 出^{しゅ}発^{はつ}

奥書き 本文

附記

341 340 328 230

.....it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing.

SHAKESPEARE: *Macbeth*

第八部

永劫えいごうの章

第一

模擬死刑の午後

昔より国に死刑の人多ければ、叛逆人たえずと云ふことを『保元平治物語』にか記して、昔よりの言習はせなり。『左伝』に所謂「仁人之言、其ノ利溥イ哉。」とは此等のことを云ふなり。小罪輕罰は、各別の事、死刑はなるべく少なくすべきこと、天子諸侯より司刑の官吏まで心得べき事なり。さればとて、惡民多くて死刑ヲ犯スときは、赦すべき仕方もなし。因て政事を正しくして民情風俗を厚くして、人人生を重んじて死刑を犯すものの無きやうにすると、政事の第一なり。死刑ヲ犯ス人の多くして死罪人の多き事は天下乱逆の興るべき先表なりと知るべし。

太田錦城『梧窓漫筆』後編

一

神山上等兵が摸造紙に墨書して食堂の北の羽目に張り出した「自三月上旬至四月上旬予定表」とおり、三月上旬中旬の万事は、順調に進行した。一昨十六日、昨十七日の二日間、力作（四脚十噸起重機組み立て・分解）教育が、晴天下の営庭で実施せられた。

われわれの入隊から今日までに、約七十日が、経過したのである。その力作教育実施によって、教育期間九十日における課業のほとんど（徒歩教練、銃教練〔狹窄射撃、実包射撃〕、両者の檢閲、野砲教練〔実弾射撃〕、その檢閲、力作教練など）が、終了したのであった。

あとにはただ廠営（砲台宿営）二週間強（四五式十五加教練〔実弾射撃〕、その檢閲）だけが、残っている。砲台へ出発は、明十九日の予定である。

十四日（土曜）は雨降りであったが、十五日（日曜）から晴れが続ぎ、十八日も早朝から上天氣を呈した。午前の前半には、四五式十五加に関する三個班合同学科が、食堂で行なわれ、午後の後半には、内務実施が、三個班全員に命ぜられた。午後の兵業について、われわれは、

教官班長班附からも週番下士官上等兵からも、なんら予告せられなかった。私は、『廠営準備の仕上げというようなことで、午後にも内務実施だろう。さしあたり、ほかに仕事もなさそうだから。』と臆測していた。私の臆測は、新兵大方のそれでもあるらしかった。

ところが、午後の呼集時、週番下士官は、「服装は、編上靴・巻脚絆・帯剣。今週小銃当番班の各人は、小銃携帯。」と指令した。この指令は、特に「小銃携帯。」という指令は、私（われわれ）に、すこぶる意外であつて、まただいぶん不安でもあった。

十三時、われわれは、新砲廠前庭に北面の三個班連合二列横隊を作った（第一班全員小銃携帯、三個班全員彈藥盒携帯）。右翼下士官は仁多軍曹。左翼下士官は田中軍曹。大前田軍曹、宅島上等兵、坪内上等兵、関上等兵、村崎一等兵は押伍列（神山上等兵は畑原彈藥庫衛兵勤務。永沢上等兵は風紀衛兵勤務）。白石少尉が、抜刀して指揮を執った。すぐにわれわれ二列横隊は、白石少尉の号令によって「右向け右」を為し四列縦隊となった。

「押伍列の五名は、後尾に付け。」と白石少尉が指示し、大前田軍曹以下四名は四列縦隊の後尾へ移った。ただし、坪内上等兵は、白石教官の許可を仰いだ上、風紀

衛兵所にむかつて駆け足で先発した。彼は、やがて「將校ノ指揮スル武裝シタル部隊」が営外へ出るであろう、ということをも風紀衛兵に予報してやるのである。……その種の部隊が営門を出入するときには、風紀衛兵は、衛兵所の表に整列して敬礼しなければならない。営門歩哨なり控え歩哨なりは、「將校ノ指揮スル武裝シタル部隊」が営門（衛兵所）に近づくのを認めると、ただちに「整列。」と警告する。しかし、とりわけ「將校ノ指揮スル武裝シタル部隊」が営内（営庭）から営外へ出る場合には、この屯営の営門歩哨なり控え歩哨なりは、——営庭の大部が哨舎附近ないし衛兵所内から「死角」になつてゐるため、——当の部隊が営門（衛兵所）にずいぶん近接するまで、しばしばそれを確認することができず、そのたびに司令以下の全衛兵は、あわてふためいて衛舎前に整列しなければならない（もつとも、たとえば野砲輓曳営外行軍は、その気配などによって衛兵に予知せられる）。目下の坪内上等兵のように誰かが氣を使って予報してやることも、往往あり、それは、衛兵にとつて甚だ都合なことである。……本日は僚友班附永沢上等兵が衛舎掛兼歩哨掛として上番しているから、坪内上等兵は、いよいよ氣を使って先発したのであろう。

白石教官の指揮下に、われわれ四列縦隊は、十三時四分ごろ、風紀衛兵喇叭手が吹奏する「皇御国」一回の曲調を聞きつつ、營門を出た。われわれは、午後の兵業が何であるかをも行き先がどこであるかをも全然知らせられていなかった。營門外正面の丁字路で、白石教官は、「伍伍右へ、進め。……歩調止め。」と号令した。われわれは、鶏知本通りを東へ行進し、笹居文海堂前（三叉路）を南東へ通過した。われわれの行進が真南に向かったあたりで、家並みがまばらになった。左（東）手の田圃の向うに、標高四、五十メートルの遙拝山がある。ほどなく道は、鶏知川に沿った。白石少尉は、「行軍目標、高浜演習砲台。——途歩。ただし、タバコを吸わない。またみだりに雑談をしない。」と行き先を初めて明示し、号令して、刀を納めた。

私は、『やはり高浜演習砲台行きか。だが、徒歩教練、銃教練の検閲も済み、野砲の実弾射撃も済んだというのに、今日は演習砲台で何をするのだろうか？』といふかった。私は聞き留めたが、私の前後で何人もの兵たちが、私のそれとおなじような疑いをささやき交わした。この道を、われわれは、二月二十五日の第一回高浜演習砲台行き以来、三月十日の実弾射撃まで、何度も野砲を輓曳

して往復したのであった。

鶏知川が左（東）方の高浜海岸・鶏知浦にむかって道を離れる地点近辺から、私は、二十数人の一部隊が高浜演習砲台方向へ左折したのを斜め左前方百二、三十メートルに望見することができた（私は、三個班連合四列縦隊後尾附近の列兵であったゆえ、前方の見通しがほとんど利かず、それまではその部隊が目に入らなかった）。通信器材（単旗、九二式電話機、被覆線絡車その他）を携行せる彼らは、二年度乙種幹部候補生たち（半数は元来の対馬部隊入隊者、半数は下関部隊よりの教育分遣者）であって、引率（指揮）者は、二年度乙種班長堺山軍曹であった。乙種班部隊の最後尾に、私は、村上少尉を見つけた。たぶん彼らは、通信教育訓練のため高浜演習砲台方面にむかって、われわれよりも一、二分早く營所を出発したのであろう。

まもなくわれわれは、二年度乙種班部隊とおなじく丁字路を左（東南東）に曲がって高浜演習砲台への一筋道を進み出した。この一筋道をわれわれが歩くのは、八日ぶり（野砲実弾射撃当日以来）のことである。一月十日起算入隊六十日目（三月十日）の野砲実弾射撃は、なにもんにも教育召集九十日間の「峠」であった。

——三月十日（陸軍記念日）朝の私は、起床時限前約三十分の五時半ごろ、起き出た。不寝番三番立ちが第二班員四名であつて、その一名が佐田二等兵（第一班員藤麻とともに小銃担当における私の相役）であつた、ということは、私に都合がよかつた。前夜（九日夜）私は、「ちと用事があるから、明朝五時二十七、八分に、おれを起こしてくれ。」と佐田に私的に依頼しておいた。しかし、十日早朝、佐田が起こしに来てくれたときには、私は、すでに寝台上で軍衣袴を着用していた。

ひそかに手ぬぐいをたずさえ、私は、新砲廠を東方潜り戸から出た。私は、その不寝番立ち番に大用所行きの旨を便宜的に告げた。東天は、ほのかに紅く、四方は、おもむろに白みつつあつた。ほぼ仲春とはいへ、早曉の大気は、さすがに相当つめたかつた。私は、人目（あり得るべき巡察衛兵などの目）を憚（はばか）つて営庭の南辺および東辺を急ぎ足に通行し、浴場に達した。

むろん浴場内には誰もいず、浴槽も空っぽであつた。だが、浴槽裏手水槽は、いつもながらに冷水を湛えてい

た。私は、手早く全裸になり、まず冷水を手桶に汲み、顔を洗ひ手足に注いでのち、おなじ手桶で七、八杯の冷水を頭から全身にかぶつた。

私のこの行為は、なんら宗教的または觀念形態的な意味を帯びてはいなかつた。すなわち、それは、神道的または復古的な「禊（みそぎ）」だの「垢離（あがり）」だのには全然無関係であつた。「地方」において、もともと年来（「禊」だの「垢離」だのとはまったく独立に）私は、真冬でも冷水を毎朝浴びていた。入隊以降私は、それを已むなく取り止めてきた。それにしても、兵隊私の浴場行きの目的ないし楽しみは、むしろ湯上がりの冷水浴にあつた。めつたにない爽快感が、ほとんどそのときにだけ私の身内を洗ひ流れる。

野砲操法の習得、その仕上げとしての実弾射撃に、私は、深厚な関心を抱いてきた。一月中旬に「お前らが火砲の教育を受けても、学校出のへなへなが拉縄引いたり照準したりしたとじゃ、破甲榴弾は飛び出しもせにや当たりもせんぞ。百姓出か職工出の兵隊の爪の垢でも煎じて飲め。」云々と「学校出」兵隊をののしつた大前田軍曹は、二月下旬にも「じゃけん、初手からおれは、お前に固定二番砲手をやらせるちゆうことに氣乗りがせんじ

やった。どっちみち、そげな奴の本性は、実弾射撃になりや、すぐわかる。うん？ 東堂。」云云と「学校出」私に毒づいたのであって、その彼に私は、「はい。実弾射撃になれば、すぐ明白にわかります。」と反語的に広言したのであった。三月十日当日は私が心身を特別さわやかに引き締めて野砲実弾射撃に臨まねばならない、と私は、かねて考えていた。昨九日夜、私は、いっそうそういうふうにかえた。そのような次第から、私は、早き冷水浴を実行したのである。

浴場を出た私の眼に、天地は、たいそう明るさを加えていた。昨九日午前後半および午後、われわれは、旧砲廠内で、実弾射撃用野砲四門に関する射撃前の手入れ（特に砲腔、閉鎖機、閉鎖機室、撃発機、撃発機室、揺架上面砲身滑走部などの拭浄および塗油、駐退機、方向照準機、高低照準機などの機能円滑化）を済ましたのであった。『昨日は、昼間は雨、夕方からは曇りだったが、今日の陸軍記念日は、快晴らしいな。こりゃ、実弾射撃に好適の日（ひ）だろう。』と私は思った。

品川軍医から私が借用せる『新訂野砲兵須知』（陸軍中佐塚越照編・昭和十三年（一九三八年）初版・帝国兵書刊行会刊）中の「大祭祝日及記念日」には、「陸軍記念日（三月十日）」に関する記述が、左のごとく見出された。

明治三十八年（一九〇五年）三月十日は、日露の役、奉天（瀋陽）附近の戦ひが我れに最も有利に展開した日である。即ち二月下旬大山満洲軍總司令官より前進命令を受領したる各軍は一斉に攻撃前進を開始し、幾多の奮戦苦闘を重ね逐次敵を強圧し、三月十日最右翼の川村鴨緑江軍は奉天東方約十里（二里は四キロ弱）の撫順に、右翼の黒木第一軍は奉天東方約五里の蒲河南方高地に、中央の野津第四軍は奉天東北方約二里の魚鱗堡附近に、左翼の奥第二軍は近く奉天西北地区に進出し、更に一部を以て奉天城内に進入し、最左翼の乃木第三軍は敵の最右翼を巧に迂回して、奉天鉄嶺道の西側僅僅千米の観音屯及北方小辛屯の線に進出して、奉天東北方及北方地区に進出せる第一、第四、第二軍と連絡成り、敵の狂亂的反撃も遂に其甲斐なく、敵將クロバトキンをして奉天を放棄するの已むなきに至ら

しめ、十一日以後敵を追蹙して十五日鉄嶺、昌図の線に進出し得るに至り、茲に我軍は未曾有の大勝を博し、約二旬に亙る奉天会戦の局を結んだのであって、陸戦の運命を決し、我軍の大勝を博せし祝福すべき記念日である。(中略)

此会戦に於ける参加兵力は日本軍約二十五万、露軍約三十七万、戦線約二十里に亙り、敵の死傷約六万、俘虜約二万二千、砲四十八門其他兵器材料多数を鹵獲したるも、我死傷亦約七万に達せり。

(こえて三月十日、日本軍は奉天を占領した。その後日本は、今次の敗戦まで、この日を陸軍記念日として祝ったのである。だが、その真実の姿について『機密日露戦史』はこう記している。

総司令部は昨日来の不快一掃せられ、第一、第四軍は東方より、第二軍は西方より奉天を包囲攻撃し、就中近衛師団は敵の退路を拒止し遂に有力なる敵兵団を生擒するを得たりとは表面的常套文句なるも、当日各軍の行動を仔細に調査せば次の如きを見る。

1、鴨緑江軍及び第一軍主力は渾河右岸に近く停止して、遠く北方に去れる敵軍を追ふことなし。

2、第四、第二軍は奉天の周囲に集中し、その一部は城内に入りて僅かに敗残の敵一旅団内外を潰滅降伏せしめしのみ。

3、第三軍は優勢なる敵の逆襲を受け、密に攻撃発展を見ざるのみならず、現位置を占領して待機の姿勢を執らしめたるまま何等命令する所なし。

以上の状況に対し総司令部は已に光輝ある戦勝を博せるものと樂觀し、自然に放任せるは吾人が口を極めて之を非難せざるを得ざる点なり。

日本軍としては当面の敵軍に勝つことがせいっぱいで、決定的な打撃を与えるだけの力を持たなかったのである。

この戦闘について、満洲軍作戦主任参謀松川大佐は、その日誌にこう批評している。

1、各軍中第二軍のみは戦闘らしき作戦指導を行ひしも、他軍は軍の体裁をなさず。就中第三、第四軍は命令行はれず。

2、後備旅団は悉く用をなさず。

3、一般に軍隊の運動は過去の諸会戦に比し足重を

感じたるは、補充兵多きに原因するならん。

この戦闘に参加した日本軍の兵力は総数二十五万名、ロシア軍は三十五万名で、両軍ともに十万をこえる死傷者をだした。ロシア軍の敗北は明らかであったが、日本軍の損害も甚大で、決定的な勝敗はなお未知数であった。

日本軍の一部は退却する露軍を追って、十六日、鉄嶺を占領し、さらに開原の線まで前進した。

〔隅谷三喜男『大日本帝国の試煉』一九六六年初版〕

三八式野砲実弾射撃は、中隊教練（の一環）として行なわれ、指揮小隊（観測分隊および通信分隊）は、二年度乙種幹部候補生（伍長の階級）たちをもって編成せられ、戦砲隊（二個砲車小隊）ならびに段列は、われわれ新砲廠班教育兵をもって編成せられた。

中隊長 白石教官

右砲車小隊長 仁多班長

第一分隊長（坪内班附）

第二分隊長（永沢班附）

左砲車小隊長 大前田班長

第三分隊長（関班附）

第四分隊長（宅島班附）

段列長 田中班長

指揮小隊長 堺山班長

観測分隊長（二年度乙種某）

通信分隊長（同右）

各砲車分隊長は（観測分隊長および通信分隊長も）、適時に交代した。

その編成は、おおかた従前における数回の中隊教練どおりであったけれども、実弾射撃の「全貌」は、漠然としか私（われわれ）にわからなかった。そもそもその「全貌」は、われわれにろくろく説明（教育）せられもしなかった。

——中隊教練は、二年度乙種班との連携の下に、営庭において二回（二日間各午後）、演習砲台において二回（同上）、実施せられた。中隊教練においては、特に指揮小隊通信分隊員による腕木（ウデキ、信号機）の使用・操作が、私（われわれ）に新鮮な刺激を与えた。『砲兵操典』第二部第四百五十三は、「腕木ノ位置ハ中隊長明瞭ニ其ノ

番号板ヲ目視シ砲車小隊長容易ニ之ヲ点検スルヲ得且敵眼ニ遮蔽スル如ク選定スルヲ要ス。」と規定する。既往四回の中隊教練において、腕木二本は、一本が右砲車小隊の中間後方に、一本が左砲車小隊の中間後方に、それぞれ立てて置かれた。……

……砲手が照準を終わリ「よし。」と唱えたら、当該分隊長は、「分隊長ハ発射準備完了ノ報告ヲ為スニハ手ヲ挙げ或ハ『第何』ト唱ヘ又ハ之等ヲ併用ス。」(『砲兵操典』第二部第一篇「分隊教練」「通則」第八)という規定どおりに砲車小隊長に報告する。砲車小隊長は、「砲車小隊長ハ其ノ小隊ノ各分隊発射準備成ル毎ニ分隊ノ番号ニ相当スル腕木ノ番号板ヲ起シ発射ト同時ニ之ヲ下ロサシム。」(『砲兵操典』第二部第四百八十)という規定どおりに実行する。腕木操作担当通信分隊員は、所命の番号板を(附属の紐を引いて)起こす。他分隊に関する番号板が、自己分隊のそれよりも早く「カタン」という音を立てて起きると、当該分隊の分隊長以下(殊に二番砲手)は、心がおだやかでない。……

……三月六日午後、第四回中隊教練の終わりが、白石教官は、「ただいま第四分隊二番砲手の照準完了所要時間は、平均四秒、出色の操作であった。甚だよろし

い。」と私東堂照準手を激賞した。……

われわれの実弾射撃野砲訓練は、同時に二年度乙種幹部候補生たちの実弾射撃観測訓練ないし同通信訓練を兼ねるらしかった。また、その午前におけるわれわれの野砲四門輓曳高浜演習砲台行き・放列布置は、『砲兵操典』第二部第二篇「中隊教練」第二章「重砲兵」のいわゆる「陣地占領」、「陣地進入」、「陣地設備」などに該当するらしかった。それらは、せめて私にそのように推察せられた。いずれにせよ、われわれは、「黙黙トシテ」命令に従った。そして私の予想・予断とはよほど食い違った様相において、実弾射撃そのものは、実施せられた。

「私の予想・予断とはよほど食い違った様相」の主要な幾つかは、下のごとくである。

〔一〕標的(大きな「広さ一坪くらいかの」筏)は、中央射界(演習砲台より二千四、五百メートル前方の沖合)に浮かんでいて、監的船(発動機船)は、標的の南方(砲側より向かって右のほう)四百メートルばかりの海上に浮かんでいた。標的は網で監的船につながれている(言い換えれば、標的は監的船に曳航せられている)、とわれわれは教えられた。しかし、実弾射撃間、終始、監的船は、ほとんど移動せず、したがって標的も、ほと